



大正製薬 **リポビタン**

第47回 全国選抜高校テニス大会

大会レポート

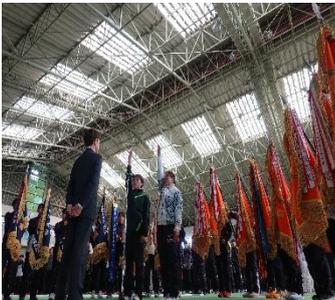
全国高等学校体育連盟テニス専門部
東海地区常任委員 岡本直哉

うらかな春の日差しに恵まれ、第47回全国選抜高校テニス大会が3月20日から26日まで福岡県博多の森テニス競技場と春日運動公園で行われた。例年はベンチコートが手放せない日も多い大会だが、今年は暖かな陽気のもと、全国から集まった高校生テニスプレーヤーが熱戦を繰り広げる7日間となった。

3月20日 監督連絡会・開会式

監督連絡会で、タイトルスポンサーの大正製薬様、共催者の公益財団法人日本テニス協会様より熱中症対策についてのセミナーを開催した。監督が最新の知識を持っていることは、選手の安全を守ると同時に、パフォーマンスの向上へつながることだと言える。近年、酷暑の中行われている全国総体へ向けたいち早い取り組みを評価する声が聞こえた。

開会式ではスポーツ庁や、日本テニス協会、福岡市など大会を支えていただいている皆様より激励の言葉をいただき、参加した選手は普段の大会とは違った雰囲気表情を引き締め、翌日からの試合へ集中を増した様子だった。選手宣誓では初出場の青森工業高校の神翔一朗選手と45年連続出場福井県仁愛女子高校の竹谷玲美選手が周囲の人々への感謝を述べるとともに、日頃培った競技力を発揮し、全力を尽くすことを誓った。



団体戦 3月21日(金)～25日(火)

・21日(金)・22日(土)

穏やかな晴天の下、各コートで熱戦が繰り広げられた。特に今年は初戦から好勝負が多く、対戦結果は5-0だが、中身はどちらに転んでもおもしろくない実力伯仲の試合を応援や観客も食い入るように見つめていた。2日間とも順調に試合は進行し、男女ベスト16が出そろった。なお東北地区代表の福島東高校は、喪章をつけてプレーした。これは、3月に永眠した、福島県出身の佐藤直樹東北地区常任委員に向けてのものだった。



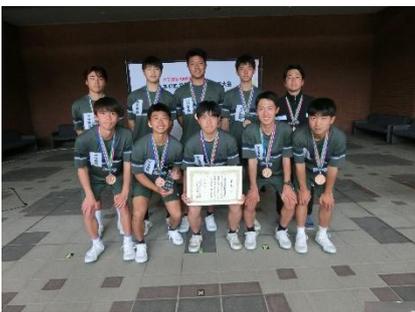
・23日(日)

ベスト8をかけた熱戦の末、男子は湘南工大附(神奈川)、麗澤瑞浪(岐阜)、関西(岡山)、四日市工(三重)、相生学院(兵庫)、柳川(福岡)、法政二(神奈川)、大分舞鶴(大分)が勝ち残った。その中からベスト4へ進出したのは湘南工大附、四日市工、5連覇中だった相生学院を破った柳川、大分舞鶴であった。女子は、野田学園(山口)、京都両洋(京都)、松商学園(長野)、鳳凰(鹿児島)、沖縄尚学(沖縄)、仁愛女子(福井)、相生学院(兵庫)、大商学園(大阪)がベスト8へコマを進め、野田学園、ノーシードから勝ち上がった鳳凰、沖縄尚学、大商学園が明日の準決勝への切符を手に入れた。



・24日(月)

いよいよ準決勝。ここから3セットマッチの戦いとなる。体力はもちろん、セット間にどう気持ちを作っていくのかも勝敗へ大きくかかわってくるステージだ。男子のトップハーフは四日市工を破った湘南工大附が、ボトムハーフは九州大会のリベンジに燃える柳川が大分舞鶴を振り切り、決勝進出を決めた。女子は野田学園と大商学園が1・2シードの貫録を示し、翌日のファイナルへの進出を決めた。



25日(火)

いよいよ決勝戦。女子は野田学園がダブルス1は落とすも、シングルス1、2を取り、優勝へ大手をかける。ダブルス2もリードした展開でファーストセットは終盤へ。しかし、タイブレークを逆転で大商学園に取られると、勢いそのままにセカンドセットも押し切られ、勝敗は2勝2敗。勝負の行方はシングルス3へかかる。ファーストセットは大商学園が取るもセカンドセットは野田学園から5-2。あと1ゲームでセットオールになる所で大商学園吉田監督がベンチに入る。これをきっかけに試合は大きく動き、5ゲーム連取で初優勝を決めた。昨年は決勝で涙をのんだ大商学園だったが、決戦前夜のミーティングで「選手と吉田監督との日本一の人間関係を見せよう」と話したそうだ。4月から別の環境で指導に当たる吉田監督へ最高の恩返しとなる感動的な優勝シーンだった。男子は湘南工大附と地元柳川との一戦となった。シングルス湘南工大附、ダブルスを柳川がそれぞれ取り合い、シングルス3に勝負がかかる。大声援に後押しされ、コートを駆け巡る柳川の選手だったが、軍配は湘南工大附の名雪選手に上がり、湘南工大附が9年ぶり8度目の優勝を決めた。



個人戦 3月22日(土)~26日(水)

今回も男女各48校のNo.1選手に加えて、各都府県のNo.1選手を含めた男子71名、女子68名でUSオープンの前選出場権をかけた戦いが行われた。

22日(土)

この日も天候に恵まれ、春日公園テニスコートで男女1回戦が滞りなく進行した。

23日(日)

団体戦出場校のNo.1選手が参加し、男女2・3回戦が行われた。

24日(月)

博多の森に舞台を移し、4・5回戦が終了した。勝ち上がりは、男子富澤直人(代々木)、田上權斗(北陸)、太田周(大分舞鶴)、江尻浩晟(東葉)、水谷大軌(浦和学院)、篠崎勇仁(法政二)、女子は清田あいこ(山陽女学園)、深町友実加(宮崎商)、早坂来麗愛(仙台育英)、杉山優那(目黒日大)、石田実莉(神戸野田)、内藤悠香(湘南工大附)であった。

25日(火)

昨日勝ち上がった6名の選手に、団体戦準決勝で敗退した学校のNo.1選手2名を加え、男女それぞれ4試合が行われた。激戦の末、男子は富澤と義基耀(四日市工)、女子は早坂と石田が翌日の準決勝へ進むこととなった。準決勝と決勝はいずれも3セットマッチの予定であり心身をすり減らすタフな戦いとなるが、世界と戦うための足掛かりと捉え、選手には持てる力を全て出し切ってもらうことを願うばかりだ。

26日(水)

大会最終日。男子準決勝は富澤が団体戦優勝校のNo.1川西飛生(湘南工大附)を7-6(5)、6-1で撃破した。川西は、試合中に出血するというアクシデントがあり、悔しい結果となった。もう一つの準決勝は、内田真翔(柳川)が義基を7-6(4)、6-4で振り切り決勝へ進んだ。女子は団体戦優勝の後藤七心(大商学園)と早坂(仙台育英)、団体戦準優勝の川崎このは(野田学園)と石田の対戦となった。早坂は緩急をつけた後藤



のテニスに苦しめられるもファーストセットを奪取するとセカンドセットも取り切り、決勝進出を決めた。川崎と石田の試合は6-2、6-3で川崎が勝利を収めた。



決勝戦の審判は9人制のフルジャッジ。福岡県の高校生審判もこの舞台にふさわしい準備を行ってきた。選手をプレーに集中させ、ベストパフォーマンスを引き出すための環境を整えていただいたことに感謝の念を禁じ得ない。先に始まった男子は激しい打ち合いの中、緩急を織り交ぜた富澤がファーストセットを6-4で先取、セカンドセットも一進一退の攻防が続くが、富澤が強気のサービスで押し込み、最後は7-5で勝利を手繰り寄せた。「この大会が今年の大きな目標だったので、本当にうれしい。肩の不安があったが、大会のトレーナーが本当に素晴らしく、自信をもってプレーすることができて、本当に感謝している。」と語る富澤。自分はパワーでは勝てないので、緩急をつけながらテニスをしていくというクレバーさを US オープンでも存分に発揮してもらいたい。



男子表彰式の後始まった女子の決勝戦はファーストセットを6-4で早坂、セカンドセットは6-1で川崎がそれぞれ取り合い、勝敗はファイナルセットへ。緊迫した展開が続く、試合はタイブレークへ。最後は早坂が押し切り7-6(4)で3時間以上にわたる戦いを制し、戴冠した。優勝後のスピーチで周囲の人々への感謝と US オープンでの活躍を誓った初々しい高校1年生は、2005年から始まった全国選抜高校テニス大会の個人戦で、東北初のチャンピオンであることを知らされると、少しはにかみながら喜びをかみしめている様子だった。



結びに

好天に恵まれ、第47回全国選抜高校テニス大会の全日程を終了することができた。

大会中に印象深い話を耳にした。今回の福岡県運営スタッフの中に、高校生の時、全国選抜高校テニス大会で審判を務めた教員がいるというのだ。残念ながら直接声を聞くことはできなかったが、この大会の歴史を再確認するとともに、スポーツの力を感じた。自分が競技を「する」だけでなく、「支える」側になった経験を生かし、次の世代を育てていく。このようにスポーツには、人の心を動かしていく力が確かにあり、高校生という多感な時期にそのチャンスに巡り合うことがどれだけ素晴らしいのかを思うと、運営に携わる人間として身が引き締まる思いがした。大会日程がすべて終了した翌日、関係者が集まりキックオフミーティングが開催された。今大会を出発点として、第48回大会をどれだけよいものにできるかを真剣に話し合う貴重な時間であった。1年後を見据えて列車は走り出している。少子化や部活離れという大きな波を止めることは簡単ではないが、「テニスの力」「高校生のポテンシャル」を示していく環境を整えることだけは続けていかなくては。真摯に物事に取り組む高校生の姿を見ると、そう思わずにはいられない。

